

# 季刊誌 神奈川芸術劇場

●“冒”ってなんだ? ●長塚圭史の基礎知識

●KAATな人の行きつけ

●神奈川へ、会いに(横浜中華街発展会)

●今日はKAATに何しに来たの?

●REVIEW ●公演スケジュール

# KAAT PAPER

2021

秋

## 特集 新芸術監督 長塚圭史のすべて



対談「芸術監督って大変ですか?」ロバート キャンベル×長塚圭史

# 芸術監督 長塚圭史を 知るための、 いくつのこと



## 長塚圭史芸術監督のことをどれだけ知っていますか？

劇作家であり、劇団の主宰、俳優など数多くの顔を持ち、演劇をはじめ多方面で活躍しています。

そこで、これまでの足跡を紐解きながら、ちょっと意外な知られざるエピソードもご紹介します。

取材・文=尾上そら

### 劇集団への強いこだわり

長塚圭史芸術監督が、自身初の劇団を立ち上げたのは大学在学中の1994年。その2年後、演劇プロデュースユニットとして「阿佐ヶ谷スパイダース(阿佐スバ)」を始動させる。さらに2011年1月には、自身の戯曲に登場する幻想・恐怖小説作家・葛河梨池(くずかわ・りいち)の思想を起点に演劇作品を発表する「葛河思潮社」を始動。ここでは三好十郎とハロルド・ピンターの既存戯曲を上演しており、殊に三好の『浮標』は、国内全域での公演を目標に掲げている。

加えて今年5～6月、KAATアトリウム特設劇場での『王将』-三部作-再演が記憶に新しい「新ロイヤル大衆舎」は、2017年に福田転球、大堀こういち、山内圭哉の三名と長塚で“日本の演劇を明るく照らす”のキャッチフレーズのもとに結成。同じ17年には、活動20年を契機に阿佐スバを劇団化し、新たなメンバーを俳優だけでなくスタッフも含めて募り、集団と活動のさらなる拡大を宣言した。

目標や理想に沿う創作のための集団を、折々につくり、更新していく長塚のエネルギーは圧倒的。KAATも加えた彼の創作基盤に死角はない。

### 東北発の挑戦的創作『蛙昇天』

2011年3月11日、東北広域に甚大な被害を及ぼし、原発事故まで起こし今なお余波が続く東日本大震災。長塚は、長く仕事を共にしてきた舞台監督・福澤諭志が仙台出身で、地元の舞台芸術に携わる人々へ向けた支援活動を始めたことに協力し、現地との交流を積極的に取るようになる。

その発展形が、長塚が演出を担い、仙台を中心に東北に関わりのある俳優たちに、阿佐スバを初期から支える俳優・伊達暁と中山祐一朗も参加した作品創造プロジェクト「CREATIO ATELIER THEATRICAL」だ。第一回作品は劇作家・木下順二の『蛙昇天』。

メンバーは2014年から約一年をかけ、背景にある日本の戦中・戦後の政治的状況や時代感などを自ら調べての発表や、登場人物が擬人化した蛙なので近隣の水田に自然観察に行くなどリサーチを実施。小道具や美術なども共につくる豊かな創造を経て翌15年2～5月までに仙台、新潟の二都市での公演を成功させる。

地域と人、舞台芸術を有機的に捉えた企画は、芸術監督・長塚の思考の基盤となるもの。プロジェクトの精神は生き続けており、いつかの復活を水面下で待っている。

### 先達への敬意と作品の継承

長塚は、常から自身で劇作・演出(俳優)を兼ねるつくり手だが、同時に国内外の劇作家による戯曲の演出を数多く手掛けている。

海外の作家では自伝的作品を多く残したテネシー・ウィリアムズ、社会派アーサー・ミラー、不条理劇の旗手ハロルド・ピンター、長塚と世代も近く、暴力と独自のユーモアでアイルランド演劇を一気に更新したマーティン・マクドナーなど実に幅広く、それぞれに成果を上げている。日本国内でも戦中戦後を生き、深い懊惱を劇作にぶつけた三好十郎や真船豊、木下順二、さらに三好の弟子で2019年にKAATで上演した『常陸坊海尊』と、今年9月に開幕を控えた『近松心中物語』を書いた秋元松代、日本人と日本という国への疑問を劇中に問い合わせた井上ひさし、新ロイヤル大衆舎で上演した『王将』の北條秀司まで驚きの幅広さ。同世代の小劇場出身者で、ここまで多彩な戯曲に挑んでいる演出家は稀有だろう。そこにある先達の大いなる創造への敬意と、それら戯曲に自身のクリエイションを加えることで更新し、継承しようという意志と情熱。それこそが、舞台人・長塚圭史の進化の原動力なのだ

### 俳優としても幅広く活躍

自身の劇作・演出作への出演だけでなく、幅広い舞台や映像作品で活躍する俳優でもある。2000年代以降は、映画やドラマにもコンスタントに出演。09年『ウェルかめ』と15年の『あさが来た』の二度、NHKの連続テレビ小説に出演した他、映画では日本映画の次世代を担う山下敦弘監督作品から、昨年惜しまれつつ亡くなった重鎮・大林宣彦監督の作品まで幅広く出演している。また石川寛監督の『tokyo.sora』(02年)では第17回高崎映画祭最優秀新人男優賞を受賞。今後は『シン・ウルトラマン』の公開も控えている。15年から続くラジオ番組『yes!～明日への便り～』での語りの他、多くのCMでナレーションも担当しており、長塚の「声」に気づかず出会っている方も多いかもしれない。

### イギリス留学という転機

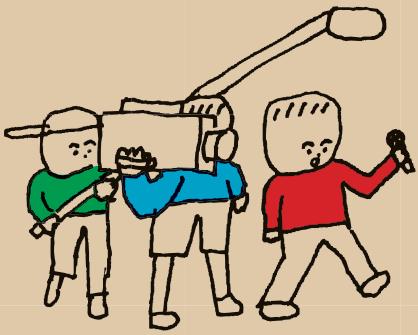
2009年から一年間、長塚は文化庁の新進芸術家海外留学制度を使い渡英。ロンドンのロイヤル・ナショナル・ナショナルシアター(国立劇場)でも数ヶ月研修している。劇場の近くにはアーティストがアイデアを試し、膨らませるための施設があり、表現者育成のための豊かな環境、公立の劇場が果たす役割などに大いに驚き、刺激を受けたと帰国後の報告会で語っていた。

そこから10年を経ての芸術監督就任は、当時得た糧や刺激を、作品とは違った形で還元する機会となるはず。芸術選奨文部科学大臣新人賞、読売演劇大賞優秀作品賞、同優秀演出家賞などつくり手として評価を確立してきた長塚が、劇場という場を得ての新たな活動の展開に注目したい。

### オススメせずにはいられない!

「自分の作品にお説教するのとは別に、面白い舞台や作品に出会った時は、躊躇なく知人友人に勧めるタイプなんです。普段は、あまり人と積極的に連絡を取ったりはしないのですが、良い作品をみつけた時だけは別。公演の広報活動を手伝うくらいの気持ちで宣伝にいそしみます。最近ではKAATキッズ・プログラム2021『クノチテクテクマナツノボウケン』を、“物語や意味をわかることが目的ではない作品だから、とにかく体験して!”と、メチャメチャ推しました(笑)」。

これは、この取材中での長塚の発言。舞台芸術や表現全般へのあふれんばかりの愛情は芸術監督になって倍加した様子で、クリエイションに加えてKAATの発信力もさらに加速させそうだ。



KAATの新たな取り組みのひとつが、シーズン制の導入です。

この秋からのメインシーズンは「冒」がテーマ。でも「冒」って一体なに?

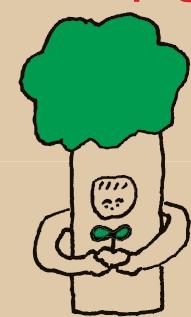
また、大きなテーマ「ひらく」と、これから始まる「カイハツプロジェクト」についても、もっと詳しく知るために、長塚芸術監督を直撃しました。

取材・文=尾上そら

なぜ「シーズン制」を導入するのですか?

劇場の活動、その展開にはメリハリが必要だと以前から考えていたのですが、確信を持ったのは芸術参与就任後。個々の作品の広報も大切ですが、「この時期、KAATは〇〇をやっているんだよね」と、利用する方々に劇場のリズムを覚えていただくことで、初めてKAATが市民の日常や地域社会の「風景」の一部となり、町とともに呼吸することができると考えているんです。

春は実験的で枠を飛び出すような作品、夏は子どもたちを中心に幅広い方々が楽しめる作品、そして秋からはシーズンテーマを軸にしたラインアップ。シーズンの流れを本来はそんな風にイメージしていますが、今期に関しては感染症禍のため延期となったプログラムも交え、春から慎重かつ素々と上演を重ねてきました。本来「冒」は8月の『湊横濱荒狗挽歌～新粧、三人吉三』(シライケイタ演出)以降の作品を束ねるものですが、今年度に関しては22年3月までの全プログラムが「冒」に含まれる感覚です。



“ぼう

各作品ごとに、「冒」に絡めた創作部分があるのですか?

「あとづけだ!」と思う方もいらっしゃるかも知れませんが(笑)、ラインアップ全作品に「冒」を重ねられる部分があると思っています。たとえば『湊横濱～』の作家・野木萌葱さんとは、モチーフとなる歌舞伎や作者の河竹黙阿弥についてなど色々話したのですが、僕が思ひがけない部分に興味を持ち、そこから新たな冒険に出るように執筆を進めてくださいました。続く、僕自身が演出する『近松心中物語』も、台詞の中に多くの人間関係や時代背景など膨大な情報が含まれているにも関わらず、ほとんど説明というものがなく戯曲を読み解き、それを俳優たちと共有する時間は、歴史や演劇そのものの深層へと踏み込む冒険のようだと感じています。

何よりシーズン最後の、『西遊記』をもとに僕自身が書き・演出して神奈川県内を巡回公演する作品が『冒険者たち』ですから。きっと、どんな表現や芸術のなかにも「冒」は含まれている。良いテーマでしょう?(笑)。



「カイハツプロジェクト」とは、なんですか?

お客様にご覧いただく作品をつくる以前に、演出家や劇作家、さまざまなセクションのデザイナー、俳優たちがアイデアを練り、新たな手法を試したり実験したりする「創造のための挑戦」を、KAATという場所とそこに集う人材を活用して、つくり手たちのバックアップをすることが「カイハツプロジェクト」のめざすところです。直接お客様にお見せするものではありませんが、結果的にそこでアーティストが自身を鍛え、蓄えた糧や磨いたスキルが作品の質を向上させるわけで、将来的な成果を還元することになります。また、このプロジェクトでは海外の劇場やアーティストとの連携も考えており、着々と準備は進めています。



シーズンテーマ「冒」はどうやって思いついたのですか?

芸術参与となり、半年が過ぎた頃からシーズンテーマを具体的に考え始めました。「義」や、「個人と全体」などという案もあったんですよ。「個人～」に関しては、後に新国立劇場で同様のテーマが掲げられ、ホッとしたのと同時に(笑)、同じ時代を生きているのだなあと実感しました。KAATは地域に根差した、ひらかれた劇場を標榜している。だから劇場発のメッセージに遊び心やワクワクも含まれていて良いはず。劇場内でそんな話し合いを重ねるうち、「冒」という案が出たんです。「冒」には「はじまり」や「つきすすむ」に加え、「無理にする」「むさぼる」といった少し怖い意味もある。でも「冒険」という単語が示すように、危険はあっても未知の領域に踏み出し、希望や夢を追うといった劇場の

新たな船出にふさわしいし、この文字のもとでなら、どんな作品も軽やかに創造を遊ぶことができると思った。温度が上がるほどに会議が盛り上がり、初のシーズン最初のテーマに決定しました。



シーズンラインアップは、日本語にこだわったそうですが、具体的には?

僕もメンバーである新ロイヤル大衆舎『王将』には古き良き大阪の下町言葉が散りばめられているし、『湊横濱～』の元となる『三人吉三』には黙阿弥特有の言葉のテンポやリズムがあり、『近松～』も戯作者・近松門左衛門の様々な戯作からの引用や江戸時代の身分制、文化を反映した台詞で綴られている。

また海外の戯曲をただ翻訳するだけでなく、テレビの最先端で活躍する脚本家・篠崎絵里子さんに、アメリカの劇作家デヴィッド・リンゼイ＝アベラーの戯曲を上演台本にしていただく、来年2～3月の『ラビット・ホール』(小山ゆうな演出)も、日本語にこだわる取り組みの一つです。文字の表記も多彩で、時代ごとに社会や人間を反映して変わり続ける

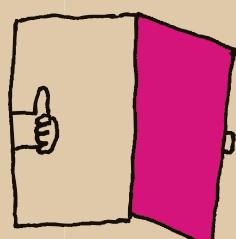
日本語をよく知ることは、日本と日本人を知ることであり、ひいては「世界の中の日本」を考えることになると僕は考えている。そんな視点をKAATでの創作・上演に組み込むことが、「日本語にこだわる」ということです。



「ひらかれた」劇場の構想は?

5～6月にアトリウムで上演した『王将』、稽古の過程が来館する方に見える状態で創作し、市民も出演者としたタニノクロウさん作・演出の『虹む街』、そしてシーズン最後の『冒険者たち』は「ひらかれた」劇場を体現するプログラムです。表現者と観客が「舞台上と客席」といった隔てを意識することなく、作品と対峙し、その一部になる。そんな鑑賞の仕掛けや環境をつくることや、『冒険者たち』のように作品と一緒に劇場を飛び出し、県内のさまざまな町、場所をめぐるスタイルで上演することも劇場を「ひらいて」いくためのアクションだと考えています。

白井晃前芸術監督時代から、アトリウムでのトーク企画や現代美術作家の方々とのコラボレーションなどが行われましたが、さらに自由に柔軟にKAATのあらゆる場所や機能を使って市民の皆さんに場をひらいていきたい。僕自身、非常にわくわくしている取り組みです。



# ロバート・キャンベル × 長塚圭史

日本文学研究者

KAAT 神奈川芸術劇場 芸術監督

対談

KAAT 神奈川芸術劇場の新芸術監督に就任した長塚圭史さんのもとを、友人である日本文学研究者、ロバート・キャンベルさんが訪ねました。「芸術監督って大変ですか?」という近況報告から始まるふたりの会話は、これからのKAATのこと、稽古中の「近松心中物語」のこと、そして劇場がもつ可能性にまで広がります。

取材・文=三浦真紀 写真=高橋マナミ(対談・表紙)



## 芸術監督って大変ですか?

**キャンベル** 芸術監督といえば、古い話をすると、明治初期、日本の劇場は歌舞伎が中心で、座付きの狂言作家はほとんどが俳優の支配下にいました。

**長塚** 座長みたいな形ですね。

**キャンベル** はい。同時期に森鷗外がドイツで多くの劇場を回り、芸術監督は大きな権限と創造性を求められる役割だと学んだのです。欧米では小さな劇場にまで芸術監督がいて、劇場の方向性を形作るだけではなく、演劇人を育てる役割も果たしています。そこで帰国後にそれを根付かせようとしたが、根っこから変わることはありませんでした。いまやKAATには開館から芸術監督がいて、宮本亞門さん、白井晃さん、そして3代目として圭史さんが就任されたわけです。今の立場から見て、日本の芸術監督はどんな状況ですか。

**長塚** まだ芸術監督の仕事が定義されていない印象を受けますね。ただ、芸術監督を置く劇場は増えており、それぞれの体系がやっと見え始めたところかと。僕が白井さんから引き継いだ基本的な仕事は、劇場の方針を定めて浸透させ、皆さんにお楽しみいただけるプログラムを作っていくこと。これが大きな仕事ですが、もう一つ新たに掲げたテーマがあります。僕はこのコロナ禍で、演劇の楽しみを知らない方が多いことを痛感しました。だから、まず演劇そのものを広報しながら、KAATを「ひらかれた」劇場にしたい。そもそもKAATは演劇好きの人には知られているけれど、そうでない人にはまだまだ遠い場所になってはいないか。そのために門戸を広く開き、地域の人たちとのつながりを拡大させていきたいと考えています。『王将』を1階のアトリウムで上演したのも、道ゆく人々にアピールするため。お客様を招き込み、KAATの魅力に触れていただけたらと。

**キャンベル** それは素敵ですね。今、いろんな通信・情報技術が進むにつれて、人々が新しいものに出会う接続面が細っている気がします。好きな音楽、絵画、食事、誰と付き合うかなど、いくらでも選択できるけれども、逆

に自分たちがちょっと前に起こした行動が反復されて選択肢として現れる。そのため、自分の行動パターンに固まっていく傾向があるんです。

**長塚** 全て追跡されていますからね。

**キャンベル** そう、検索も購入履歴も。タクシーに乗るとカメラで自分の属性を判断されて、それにより現れる広告をずっと見ることになる。超成熟消費社会の日本では当然のことですが、そこでどう“開く”かは、とても大事なことだと思います。コロナ禍は歴史的に大きな災害だけど、その中で私たちが学ぶ種はたくさん転がっています。音楽配信サービス「Spotify」のレポートによると、リスナーが確実に増えている音楽のジャンルが2つあって、一つは子供向けの音楽、もう一つがクラシックだと。自粛により、どこかで聴いたことのある音色に触れて、癒される人々が多いのかもしれませんね。ある意味、今は私たちの行動や選択肢が揺らされている状況にあるということです。そこで演劇は新たな楽しみの一つになり得るかと。

**長塚** 本当にその通りです。

**キャンベル** 今日、久しぶりにこの建物に足を踏み入れましたが、初めての人にはちょっと敷居が高いかもしれませんね。圭史さんが人を連れてくると期待したいところです。

**長塚** 確かに僕らには親しみのある建物だけど、興味のない人には入りづらいところもあるでしょうね。KAATもこの数年、館長や担当者が県内の人たちとの繋がりを広げ、具体的な活用に向けて進んでいたのですが、コロナ禍で難しくなってしまいました。ただ、たとえ観劇をしなくても、アトリウムが快適空間だったり、インスタレーションを眺めたり、『王将』みたいな上演で台詞が偶然聞こえてきたり、生きた場になるといいなあと。今は難しいけれども、お昼時にマルシェが出て、おいしいお弁当やコーヒーが買えるとか、演劇じゃなくても何か起きる場所になればと思っているところです。

**キャンベル** 世界的に公共空間、公共性のある芸術がこの10年ぐらいで音をたてて変わろうとしています。安住して次世代に繋げることはできるでしょうが、裾野を広げていくことは簡単ではありません。ほんと、どうもろこしやイカ焼きの匂いが必要じゃないかな?

**長塚** 1階においしいコーヒーとパンがあるので、きっと違いますよね。

**キャンベル** 僕は今、早稲田大学国際文学館(村上春樹ライブラリー)の顧問を務めておりまして、10月の開館に向けて準備中です。隈研吾さんのデザインによる素敵な空間には、ギャラリーやオーディオルームがあり、村上春樹さんが寄贈してくださった1万枚以上の素晴らしいレコードを聴くことができます。なかでも期待しているのは1階のカフェ。ここは募金で資金を作つて実現したもので、学生たちに運営を任せます。つまり、村上さんや妻の陽子さんが学生時代にお店をやっていたように、学生たちは本や音楽と近いところで働きながら、勉強もできる。ちょうど早稲田大学演劇博物館の隣なんですよ。

**長塚** それは羨ましいですね。

**キャンベル** 学生や子供、未来ある人々が演劇の現場に触れることで、将来関わりたいとか何かの夢が持てる、そんな場所であつて欲しいです。僕は学生時代、ボストン・オペラ・ハウスの場内案内係のアルバイトをしたことがあります。幕が上がると自由に好きな席に座って観ることができました。目の前に繰り広げられるベートーベンの『フィデリオ』から、人間がもつ暴虐性や不当な権力から人がどうやって自由になるかを学んだわけです。学校で18、19世紀のヨーロッパの歴史を習つてわかつたつもりでいたけれども、オペラで探究心を掻き立てられて、世の中の仕組みをものすごく知りたくなつた。学生が低料金で観劇できるシステムは既にあると思いますが、もう一步能動的に、好奇心の種を育てていただけたら。

**長塚** もちろん学生券はあるので、演劇から遠い学生たちにも働きかけていきたいです。また3階の中スタジオはガラス越しに見学することも可能なので作品によっては、クリエイションの現場やゲネプロ、本番を想定した舞台稽古などを見てもうこともあります。コロナ禍もあり、まだ実現には時間がかかるかも知れませんが。演劇の構築はいわば絵空事、その虚実が劇的に切り替わる瞬間が見られるのは刺激的なことでしょう。公演を見るのとはまた違う、舞台裏の楽しみを体験していただけたらいいですよね。

**キャンベル** 演劇や舞踊、朗読は、出かけていって現地で上演することも可能なのでは?

**長塚** KAATを拠点に県内7箇所の劇場を巡るツアーを企画しているところです。西遊記の三蔵法師一行が天竺を目指して旅をしている途中に、なぜか時空を超えて神奈川県にやってくる物語。現代のリアルな街の情報を入れつつ、各地に眠る伝説との絡みがあつたり、猪八戒は食べ歩きをして行方不明になつたり(笑)。各地の取材を通して繋がりを作つていこうと試みています。

また美術の分野では、白井前芸術監督のときからKAAT内のスタジオで、現代美術とパフォーミングアーツのコラボレーションを行つてきました。さわひらきさんのような第一線のアーティストが参加してくださいり、とても注目されています。この展示を劇場の中だけに収めず、表に広げていく、あるいは演劇と密接に関わることで視点を変えることも考えています。

**キャンベル** 舞台制作に関わる人だけでなく、美術作家や映画監督など、多岐にわたるクリエイターを巻き込んでいくのは良い案ですね。展示、イベント、フェスティバルなど、企画の段階から作り込んでいけば、圭史さんなら豊かで面白いものができます。

**長塚** シーズン制を導入したのも新しい試みです。この9月から、新シーズンが始まります。

**キャンベル** テーマが「冒」とは、すごくパワフルな言葉ですね。雨を冒す、風を冒す。井上陽水の曲『傘がない』みたいに、あえて雨の中に傘も差さずに足を踏み出していく、風を受けてどこかに出かける、僕にとってはそんなイメージです。

**長塚** イメージで遊べる言葉にしたかったんです。雨を冒す、または冒險のような旅に出るでもいい。シーズン制にすることで劇場にリズムが生まれることを期待しています。一つのシーズンが終わり、また新しいものが始まる。5年も経てば定着して、劇場から季節を感じていただけるかと。テーマの言葉で遊びながら、新たなものもどんどん取り入れて、KAATが多様な空間になっていくように。

**キャンベル** 最近、テレビやラジオなど公共電波の仕事に関わって、気になる

ことがあるんです。以前は視聴率や聴取率を測る際、観る、聴く人たちをF1、M3など性別と年齢で分けて、リサーチしていました。でも今、上手くいっているものは、そういったマーケティングを必要としないんですね。SpotifyやApple Musicなどの配信サービスは、古い曲も新しい曲も並列に提示することで成功しています。番組でも上手くいっているものは、ターゲットとする世代、性別を特定しない。それより今の情報と環境に寄り添うことで、時代やジャンルがミックス

されて、面白いものができます。僕も4月からYouTubeチャンネルを始めたのですが、流行りやジャンル、何か決まったことをやればビュー数が上がるというものではなくて。演劇でも、この状況をどう捉えるかが鍵かもしれません。

**長塚** 本当にそうですね。その点、KAATの来年のラインナップには、さらにいろんな時代がごちゃまぜになっていますよ。

**キャンベル** 圭史さんはオリジナルの戯曲を書く、古典を書き換える、戦前戦後の上演から遠のいている作品を再発見するなどして、新しい息吹を吹き込んだ演出家、脚本家です。その意味で、時代を超えたものが混沌とする今の状況は、すごくマッチするのでは?

**長塚** さまざまな時代のものを今に届くと信じてミックスする作業はとても面白いです。YouTubeについては不勉強ですが、そのバズり方然り、あらゆる場面でニッチな部分がぐんと跳ね上がって、多方向に転がっていくといいなあと。さまざまなジャンルが複合的に出会うことで、演劇にいろんな人々が関わり、今までにないものが次々と生まれる状況になつたら、最高ですね。

特に、僕はロバートさんと共に国文学研究資料館に3年間関わったことで、より古典への関心が湧きました。

書籍、古典籍のポテンシャルはものすごいなあ!と。面白い国文学の歴史とともに出会えて、視界がぐんと広がって、創作に繋がったわけです。

**キャンベル** 次シーズンの幕開けに、『湊横濱荒狗挽歌～新粧、三人吉三』『近松心中物語』が控えていますね。どちらも古典がベースの作品。

**長塚** 『湊横濱～』は野木萌葱さんに脚本をお願いしました。歌舞伎で有名な『三人吉三』をモチーフにした新作です。実は『三人吉三』が題材になったのはひょんなことから。野木さんはこれまで『東京裁判』『外交官』で第二次世界大戦以降の日米関係に迫るなど、史実や実際の事件をモチーフに鮮烈な戯曲を書かれてきた脚本家です。ところが打ち合わせで、「もう戦争のことは今まで書きすぎました」とおっしゃって。そこで僕が昔、中村勘三郎さんと、歌舞伎役者で現代の裏社会を描いてみたい、なんて雑談をしていたことを話したら、野木さんがメラメラと「現代の『三人吉三』を書いてみたい」と提案してくださったんです。

**キャンベル** 圭史さんが火をつけたわけですね。しかも横浜が舞台とは、面白いアイディアですよ。

**長塚** 嬉しいことに、新作を書いてほしいとお願いすると、皆さん横浜のことにしましょうと言つてください。野木さんは横浜出身なので、思うところがあつたようです。

**キャンベル** かつての横浜の廓・港崎辺りを、お嬢吉三が歩いているところを想像するだけで、ゾクっとしますね。

**長塚** それからもう一本、僕が演出する『近松心中物語』は秋元松代さん作、1979年初演の作品です。手強い戯曲ですが、この手強さに向き合つていけるのは、台詞の面白さゆえ。僕は秋元さんの台詞に魅

せられていて、近松の生み出した台詞に、そのまま井原西鶴の原文アイディアが盛り込まれていたり。そんな秋元さんの詞に、今回はスチャダラパーさんの音楽がついて、時代を超えたミックスを堪能していただけます。時代劇でありますながら、近松は現代につながるスケール感を持っているんですよね。これも国文学研究資料館での経験があったから、選択できた演目だと思います。

**キャンベル** 話を伺つただけでワクワクします。新シーズン、ぜひ観劇に伺いますね。

**長塚** はい、お待ちしています!



ロバート・キャンベル

日本文学研究者。ニューヨーク市生まれ、カリフォルニア大学バークレー校卒業。ハーバード大学大学院東アジア言語文化学科博士課程修了、文学博士。1985年九州大学文学部研究生として来日し、同学部専任講師、国立・国文学研究資料館助教授、東京大学大学院総合文化研究科助教授、同研究科教授、国文学研究資料館館長を歴任。現在は、早稲田大学国際文学館(村上春樹ライブラリー)顧問。早稲田大学特命教授。



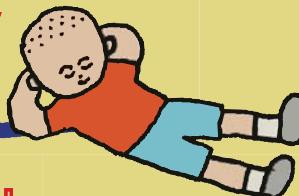
長塚圭史

井上陽水の曲『傘がない』みたいに、あえて雨の中に傘も差さずに足を踏み出していく、風を受けてどこかに出かける、僕にとってはそんなイメージです。

**長塚** イメージで遊べる言葉にしたかったんです。雨を冒す、または冒險のような旅に出るでもいい。シーズン制にすることで劇場にリズムが生まれることを期待しています。一つのシーズンが終わり、また新しいものが始まる。5年も経てば定着して、劇場から季節を感じていただけるかと。テーマの言葉で遊びながら、新たなものもどんどん取り入れて、KAATが多様な空間になっていくように。

**キャンベル** 最近、テレビやラジオなど公共電波の仕事に関わって、気になる

# REVIEW



## リーディング公演『ポルノグラフィ』

2021年4月16日(金)ー4月18日(日)  
KAAT 神奈川芸術劇場〈中スタジオ〉

### ロンドン同時爆破事件を背景に描かれる“一線”を超えた人たち

文=徳永京子(演劇ジャーナリスト)

一線を超える人と踏みとどまる人の差は何か。2005年にロンドンで起きた地下鉄とバスの同時爆破事件をきっかけに書かれたこの戯曲は、7つの章から構成され、うち6つが、超えた瞬間の前後が描かれる。会社の機密漏洩、近親相姦、時限爆弾の設置、知らない家のドアを叩いて食べ物を乞う……。エピソードが語られる度、俳優達の間を黄色いテープが張り巡らされる。それは登場人物が超えた一線であり、人々を分ける線であり、街を走る交通網、人生というタイトロープ、あるいは危険を知らせるシガナルでもある。ト書きに「何人で演じても、どんな順番で上演しても構わない」とある戯曲を演出の桐山知也はシャッフルし、その結果、爆破犯は特別な人間でなくなり、最終章でわずかな希望が灯った。けれども怖くなかったのはタイトルの意味を考えた時だ。残る1章は実際に亡くなった52人のプロフィールが並ぶ。その生に想像を巡らす時、私はスキヤンダラスな物語を期待してはいないか。自分が安全地帯にいると考えている人間は、線の向こうをおもしろ半分で覗こうとする。それが分断の一因にもなるのに。



撮影=中村彰

作:サイモン・スティーヴンス  
翻訳:小田島創志  
演出:桐山知也  
出演:上田桃子、内田淳子、  
小川ゲン、奥村佳恵、  
豊山隼太、那須凜、  
平原慎太郎、堀部圭亮  
(五十音順)

## 『虹む街』

2021年6月6日(日)ー6月20日(日)  
KAAT 神奈川芸術劇場〈中スタジオ〉

### 多様な神奈川県民も参加、“言語に頼らない対話”が弾む

文=桂 真菜(舞踊・演劇評論家)

タニノクロウ作・演出『虹む街』の美術(稻田美智子)は、横浜の風景に基づく古い飲食店街。俳優のなかには、中国やインドにルーツをもつ神奈川県民もいる。外国語の響きや餃子などの料理の匂いが、世界各地の文化を集めた港湾都市の歴史を運ぶ。多様な俳優が演じる人物同士の“言語に頼らない対話”

は、客席の集中力を高める。声音、仕草、視線といった要素を、観客が五感を開いて追うからだ。公衆トイレの装置が、出自に関わらず人間は食事と排泄を繰り返す同種であることを明かす。

栄養摂取に次ぐ人類共通の習慣は洗濯。舞台中央のコインランドリーでは、大量のタオルを洗う口を利かない男(金子清文)が、来訪者を助ける。優しさの連鎖をよぶ店内は、人々の悩みも洗い流す広場のよう。しかし、脚の不自由なオーナー(安藤玉恵)が、今宵限りの閉店を告げる。

支え合うスペースの消滅は、共同体の衰勢を暗示した。儚い縁が失われる間際に、オーナーと男の心が触れる。その繊細な表現を彩る微かな呼吸も、隣人たちが分けた赤いスイカも、斜陽の街に寄せるタニノの思いを映す。寡黙な本作は、観客それぞれが内容を自由に受け止め、イメージを広げる可能性を宿している。



撮影=田中亜紀

## 『王将』ー三部作ー

2021年5月15日(土)ー6月6日(日)  
KAAT 神奈川芸術劇場  
<アトリウム特設劇場>

### 坂田三吉の一代記を清々しく新芸術監督、上々の滑り出し

文=山口宏子(朝日新聞記者)

作:北條秀司  
構成台本+演出:長塚圭史  
出演:福田転球・大堀こういち、  
長塚圭史・山内圭哉  
(新ロイヤル大衆舎)、  
常盤貴子、江口のりこ、  
森田涼花、弘中麻紀、  
櫻井章喜、高木稟、  
福本雄樹、荒谷清水、  
塚本幸男、武谷公雄、  
森田真和、田中佑弥、  
忠津勇樹、原田志

一日がかりで『王将・三部作』(北條秀司作、長塚圭史構成台本・演出)を観た帰り道、幸福な気持ちに満たされて駅へ向かった。

延べ6時間。18人の俳優たちは、希代の将棋さしである坂田三吉と彼を取り巻く人々の四十余年を濃密に生きた。その時間をともに過ごした観客は、最後に、三吉と一緒に穏やかで暖かな場所にたどりつく。このことが、人々が集まり、直接触れあうことに困難が伴ういま、ひとときわ尊く感じられた。

長塚の芸術監督としてのスタートとなるこの作品は、劇場アトリウムの道路に面した一角を、旅芝居や見せ物小屋を思わせる色鮮やかな幔幕で囲った仮設空間で上演された。

昼は外光が透ける幕越しに往来の人影が見え、車の音や館内のざわめきも聞こえてくる。しかし、それらは決して「邪魔」ではない。演劇が街や社会とつながっていることを伝える「表現」の一部となり、長塚の所信を示している。こうした「ノイズ」の中でも、せりふがはっきり聞こえ、ドラマに集中できる環境を、音響や照明などの細心のスタッフワークが作り上げている。

「ええ将棋さしになりたい」。その一念で生きた三吉は、無学で無鉄砲なところはあるが、人柄はまっすぐで、卑しさや邪心がまるでない。この人物を福田転球が清々しく表現し、北條戯曲のおもしろさを存分に伝えている。常盤貴子演じる妻の小春は、世を去った後も穏やかな微笑で三吉を包み、三吉にとって鋭い批評者であり理解者でもある長女・玉江を江口のりこがキリリと演じる。

大堀こういちは、各部の冒頭に登場し、もとは別々に発表された三つの部をつなぐ「語り」を務めるほか、三吉の恩人の医学博士から幼い孫まで多彩な役で大活躍。音楽も担当する山内圭哉は後援者・宮田などの役で活力ある演技を見せる。三吉の友人・新吉役などを務める高木稟に精彩があり、とりわけ、三吉の後妻まさ役での悲哀をにじませた姿が心に残る。

スタッフ、キャストをみごとにまとめ、長塚芸術監督、上々の船出である。



撮影=細野晋司

## 『未練の幽霊と怪物ー「挫波」「敦賀」ー』

2021年6月5日(土)ー6月26日(土)  
KAAT 神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉ほか

### 夢と歪みを炙り出す、受け継がれた演劇の力

文=九龍ジョー(ライター・編集者)

作・演出:岡田利規  
音楽監督・演奏:内橋和久  
出演:森山未来、片桐はいり、栗原類、  
石橋静河、太田信吾/七尾旅人(謡手)  
演奏:内橋和久、筒井響子、吉本裕美子

世阿弥が「夢幻能」を確立し、約6百年。そのポテンシャルがしかと発揮される様を見た。現代演劇の先端を切り拓いてきた演劇作家・岡田利規による、言わばハイブリッド現代能だ。陶酔を拒むフラットな照明。能舞台を模した床部分は、橋がかりを含めると漫画の吹き出しのよう。衣裳や舞台美術の蛍光色がポップさを印象づける。舞台後方、囃子方の位置では、音楽監督・内橋和久のもとダクソフォンの三重奏が多彩な音を出す。

平易な現代口語だが、台詞には詩的な緊張感が漲る。ここに能の作劇法が生きている。近年、岡田が能の現代語訳に取り組んできた成果だろう。

建設中の新国立競技場を見物にきた観光客(太田信吾)の前に、五輪スタジアム案を白紙撤回された建築家ザハ・ハディドの靈(森山未来)が現出する『挫波』。太古の地霊のようなグレーの衣姿だが、その舞が生み出す鋭いエネルギーはザハの未来的建築造形にも接近する。約束を反故にされた忿怒が、私たちのたどり着けなかった夢へと昇華するかのごとく。

続く『敦賀』では、日本海沿いをドライブする旅行者(栗原類)の前に、核燃料サイクル政策の靈(石橋静河)が現れる。高速増殖炉という潰えた夢。舞は、煩悶とともに狂おしさを増していく。両篇を通じ、謡手を一手に担う七尾旅人が叫ぶ。「十万里」と。放射能の減滅期を指すその言葉が、無人の潮騒の風景へと重なった。

近所の人(片桐はいり)がコメディリリーフ的役割を果たしつつ、全体の圧を高めている。能の間狂言もかくあるべしか。舞台に引き出された想像力が、反転をもたらす。うち捨てられた夢が劇場の外に拡がる。この現実に放り出された私たちは、いまだ微睡んでいる。



撮影=高野ユリカ Yurika Kono

## KAATな人の行きつけ

《第1回》

長塚圭史さんの行きつけ

## ビストロデュポール・銅鑼

KAATの周辺は、食事や買い物、観光スポットが豊富な魅力的なエリア。そこで出演者や展示アーティスト、スタッフが足繁く通う、この街の“行きつけ”をご紹介します。

写真=河内彩



鮮魚のカルパッチョ ¥1,200

〈ビストロデュポール・銅鑼〉はKAATから徒歩約1分。観劇に訪れたお客さまが立ち寄るほか、白井晃前芸術監督も通った劇場関係者の憩いの場です。ユーモア溢れるご夫婦とシェフが迎えてくれる店内は、落ち着いた雰囲気でりんごがアットホーム。「おいしい素材を美味しい料理に」をモットーに、各国料理の経験を積んだシェフが腕を振っています。長塚さんをはじめとしたお客さまに特に人気なのが、鮮魚のカルパッチョ。その時々の旬の魚2種にオリーブオイルと醤油ムースを合わせました。開店以来17年間変わらず愛されるこの逸品に合わせるのは、カリオルニアワイン。300種類以上あるラインナップの中から、料理や好みに合わせて選んでもらうことができます。公演後には、ワイン片手に感想を語らうのも楽しそうですね。



## ビストロデュポール・銅鑼

〒231-0023

神奈川県横浜市中区山下町25-14 モナビルB1F  
☎045-662-7030 日曜定休、日曜以外の祝祭日は営業  
11:30-14:30(L.O.14:00) / 18:00-23:00(L.O.22:00)  
※新型コロナウイルスの感染拡大対策等により営業時間は変更となる場合があります。

## 神奈川へ、会いに

&lt;横浜中華街発展会協同組合&gt;

第一回

長塚新芸術監督が、今、気になっている街の人ふらっと会いに出かけます。  
たかしのぶまさ  
第1回目はKAATのご近所、横浜中華街発展会協同組合理事長の高橋伸昌さんと、  
しょうじょうち  
副理事長の鐘上智さんをお訪ねました。



写真=猪原悠



**長塚** 来年2月の公演『冒險者たち～JOURNEY TO THE WEST～』にも、ご協力いただけますよう、ありがとうございます。

**高橋** 私たちも楽しみにしています。最近、KAATが街により近い存在になったと感じていたんです。もともとKAATのある山下公園の裏手は、歴史的建造物が多く文化的な場所なんですが、市民が憩うスペースがないんですね。

**長塚** コロナの状況が良くなれば、KAATのアトリウムを中華街で買った肉まんを食べながら休憩できるような場所にしたいと思っています。それにしても、横浜中華街は調べるほどに面白い街ですね。

**高橋** ニューヨークのチャイナタウンは華僑による華僑のための街ですが、横浜の中華街は日本人と華僑が一緒に作った街です。訪れる人も95%が日本人。これは世界的に見ても珍しいことです。

**長塚** この街の成り立ちを見ると、日本の国際化にとって非常に重要な拠点ですよね。

**高橋** 横浜は「宝は海からやってくる」という街で、開港以来、外国の文化を受け止め、融合してきました。だから、新しいものに寛容です。

**鐘** 私は日本で生まれた3世なんですが、高校までアメリカンスクールに通っていたので、中国語がほとんど話せません。春節や閏誕など中国の文化を継承しながらも、私のような人が増えてきました。それに「中華

## 今日はKAATに何しに来たの？

観劇やアート鑑賞、街散策など、さまざまな目的でたくさん的人が集まるKAAT。

そこで、夏のある1日、KAATを訪れた人たちに「今日は何しに？」と声をかけてみました。



- Q1 馬車道で散歩をしていたら目に入り、涼むついでに公演情報を目に立ち寄りました。Q3 劇団ロロの「マジカル肉じゃがファミリーツアー」など何度も公演を観に訪れていました。Q4 友人が出演する公演を観に来たことがきっかけです。9月から始まる「近松心中物語」にも出るので楽しみにしています。Q5 ギャラリーがあって美術展もやっているところが、文化的で面白いなと思っています。



## 共通質問

- Q1 今日は何しにKAATに来ましたか？  
Q2 お住まいは近所ですか？  
Q3 KAATにはよく来ますか？  
Q4 KAATのことはどこで知りましたか？  
Q5 KAATの好きなところは何ですか？



- Q1 とりふね舞踏舎の「サイ Sai」を観に来ました。今の世の中を考えさせられたり未来への祈りを感じてとてもよかったです。Q2 横浜市内に住んでいます。Q3 横浜21世紀座のときよりも立派な建物になりましたね。その頃からとりふね舞踏舎の公演を観に来っていました。Q5 大スタジオは舞台と客席が近く、どの席に座ってもよく見えるし、目の前まで来て演技してくださるのがいいですね。

- Q1 知人が今日の公演「サイ Sai」で踊っているので、それを観に来ました。めちゃめちゃかっこよかったです。Q2 都内に住んでいます。Q3 KAATには今日初めてきました。公園が近くにあるのがいいですね。Q4 名前は知っていて良い舞台を上演する劇場だなという印象がありました。Q5 大きい窓が特徴的で、建物が素敵ですね。細部に至るまで考えて作り込まれている感じがします。

街」といっても出身は中国本土、台湾、香港、シンガポールと様々です。

**高橋** ただ、国際的である一方、横浜というプライドから「ムラ意識」のような部分も少なからずあります。それでも、みんながこの街を良くしたいという思いは共通して持っています。

**長塚** KAATもその一部にきちんと入っていかなくては。この10年で、演劇を鑑賞する習慣がある方には名が知られるようになりますが、劇場近辺の方、神奈川県民の方にはまだ知名度が低いのが実情です。もっと、誰もが気軽に立ち寄れる場所にしていきたいのですが。

**鐘** ニューヨークでは、仕事終わりに飲みに行くか、それともカラオケかクラブか、という選択肢にブロードウェイがありますね。

**長塚** 一朝一夕には難しいですが、いつかそうなれたら。そのためにも、中華街や横浜と連携しながら様々なことに挑戦していきたいと思っています。

**高橋** ぜひ、一緒に盛り上げていきましょう。



左から、横浜中華街発展会協同組合の鐘上智副理事長、高橋伸昌理事長、長塚圭史芸術監督

## 長塚圭史の思いつき

これからの新しいKAATを探るなら、そのヒントは長塚芸術監督の頭の中にあるはず。  
そこで、「長塚さん、最近どうですか？」と、今ほんやりと考えていることを聞いてみました。

今は新しい演目の稽古と、数年先の計画を立てるために色々と話し合っています。稽古や新作の準備はありますが、先々の計画を立てるのもとても大切です。ただしコロナ禍もあって、数ヶ月先を予測するのも難しい。そんな中でも、何年も先の演劇の未来を見据えていかなくてはいけない。まだ厳しい状況が続きますが、こんな時こそ実験的にも走り続ける必要があります。ロバート・キャンベルさんや横浜中華街発展会のみなさんとお話しすることで、多くのヒントをもらいました。今回、この冊子を発行したのは、KAATに来館した方へ新しい情報を届けすることはもちろん、まだKAATをご存知ない方に劇場を知って頂く機会にしたいという思いと同時に、異分野の方や神奈川県のみなさんと交流する場になればと思っています。僕としては大きな収穫がありましたが、読んでくださった方はいかがでしたか。ご意見やご感想など頂けたらとっても嬉しいです。また次号もいろんなことを企画していますので、楽しみにお待ちいただけたら幸いです。

※ご意見・ご感想をぜひツイッター・インスタグラムに「#kaatpaper」を付けて投稿してください。  
もしくはkouhou03@kanagawa-aif.orgまでメールをお願いいたします。

# みんなのKAAT バックステージツアー 準備中

KAAT神奈川芸術劇場は、  
より多くの皆さんに劇場に  
親しんでいただくために、  
定期的にバックステージツアーを  
開催していく準備を進めています。



「みんなのKAAT バックステージツアー」では、  
普段は見ることのできない劇場の裏側を探検。  
まだKAATに来たことのない方にも、  
いつも観劇を楽しんでいる方にも、  
劇場の「魔法」の秘密をお見せします！



詳細は決まり次第、  
KAATのウェブサイト  
でご案内いたします。  
<https://www.kaat.jp>



**KAAT 公演スケジュール 2021 AUTUMN**

8月27日 金	－ 9月12日 日	KAAT神奈川芸術劇場プロデュース 湊横濱荒狗挽歌～新粧、三人吉三。	大スタジオ
9月4日 土	－ 9月20日 月・祝	KAAT神奈川芸術劇場プロデュース 近松心中物語	ホール
9月9日 木	－ 10月8日 金	KAAT EXHIBITION 2021 志村信裕展   游動	中スタジオ
9月23日 木・祝	－ 9月26日 日	KAAT DANCE SERIES 2021×Dance Dance Dance @ YOKOHAMA 2021 エリア50代	大スタジオ
9月26日 日	－ 10月5日 火	望海風斗CONCERT「SPERO」	ホール
9月30日 木	－ 10月3日 日	TAK in KAAT theater 045 syndicate 第3回劇場本公演 ヨコハマ・ヤタロウ～望郷編～	大スタジオ
10月16日 土	－ 10月17日 日	KAAT DANCE SERIES 2021×Dance Dance Dance @ YOKOHAMA 2021 Noism Company Niigata × 小林十市 A JOURNEY～記憶の中の記憶へ	ホール
10月23日 土	－ 10月24日 日	Dance Company Lasta New Work 2021 奈落	大スタジオ
10月26日 火	－ 10月31日 日	MANKAI STAGE『A3!』 Troupe LIVE～SUMMER 2021～	ホール
10月28日 木	－ 11月7日 日	劇団た組 ぽに	大スタジオ
11月		劇団あはひ 20/21	大スタジオ
11月		KAAT神奈川芸術劇場プロデュース アルトゥロ・ウイの興隆	ホール
11月		OrganWorks	大スタジオ

\*情報は8月20日現在のものです。今後変更となる場合がございます。各公演の詳細はKAATのウェブサイトにてご確認ください。

**KAAT 神奈川芸術劇場**

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281  
TEL.045-633-6500(代表) FAX.045-681-1691  
<https://www.kaat.jp>

〈電車でお越しの方〉

- みなとみらい線: 渋谷駅から東横線直通で35分! 横浜駅から6分!  
日本大通り駅から徒歩約5分。元町・中華街駅から徒歩約8分。
  - JR根岸線: 関内駅または石川町駅から徒歩14分。
  - 市営地下鉄: 関内駅から徒歩14分。
  - 市営バス: 芸術劇場・NHK前すぐ。

横浜駅前東口バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約25分)  
桜木町駅前バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約10分)  
※上記のりばから発車するバスはすべて「芸術劇場・NHK前」を通ります。  
ただし、148系統急行線を除く。

指定管理者：(公財)神奈川芸術文化財団

KAAT神奈川芸術劇場では新型コロナウイルス感染拡大予防対策を徹底し主催公演を実施します。ご来場前に必ず、劇場HPの「ご来場のお客様へのお願い」をご確認ください。

